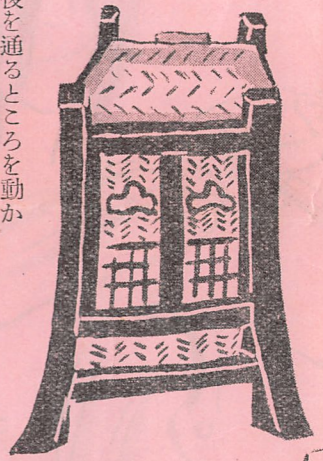
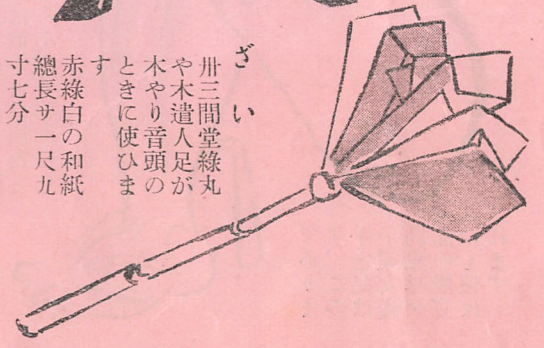


行列

忠臣藏の道行に大名行列が松の後を通るところを動かして見せるのに使ひます、切り出しもの鳥毛の白以外は總て赤緑紫の金襴袋、横四尺六寸、高一尺六寸



勸進帳の辨慶に使ひます  
高一尺一寸、幅七寸二分  
横幅四寸六分



卅三間堂縁丸  
や木遣人足が  
木やり音頭の  
ときに使ひま  
す  
赤緑白の和紙  
總長サ一尺九  
寸七分



自然木の杖 日向島の景清のみに使ひます 茶墨色 三尺三寸

祈皇軍武運長久

國を護つた  
傷兵護れ



國民精神總動員  
舉國一致  
盡忠報國  
堅忍持久

前賣切符

一等席指定券に限り五日前より左記場所にて前賣開始致します。

四ッ橋 文樂座  
心齋橋筋 京阪案内所  
朝日ビル プレイガイド  
電話南四七壹壹番  
電話南一八三六番  
電話北九三九五番

◇團體の御申込みは特に御便宜に御取計ひ申上げます

◇平日御觀覽料◇

一等席	二圓八十錢
二等席	一圓二十錢
三等席	五 十 錢

(座席四十錢上り)  
(外に各等入場税一割)

◇御案内

お下足の用意は御座いますが靴、草履はそのまゝ御入場出來ますので御便利です。

座 樂 文 橋 ツ 四

電話南 七三〇七 八三三二 八八二二 番

文樂座人形淨瑠璃  
初春本格興行

一月元旦初日

初日 二日 三日  
午後二時開演 午後三時開演



媛房完備

座 樂 文 橋 ツ 四

第一 假名手本忠臣藏

道行旅路の嫁入

山科閑居の段

道行旅路の嫁入より  
山科閑居の段まで

(午後三時より)  
(五時二十分まで)

竹本 駿太夫  
竹本 伊達太夫  
竹本 松島太夫  
豊竹 相瀨太夫  
豊竹 新左衛門  
鶴澤 清一郎  
野澤 喜代助  
野澤 喜代助  
豊澤 新太郎  
鶴澤 友三郎

山科閑居の段  
後 前  
豊竹 本新太夫  
豊竹 本新太夫  
鶴澤 清太夫  
鶴澤 清太夫  
竹本 駿太夫  
竹本 駿太夫

(人形役割)  
娘 小無瀬 戸無瀬  
妻 女おり石  
下女 おり石  
加古川 本藏  
大星 由良之助

吉田 文五郎  
吉田 文五郎  
吉田 文五郎  
吉田 文五郎  
吉田 文五郎  
吉田 文五郎

第二 娘景清八島日記

日向島の段

日向島の段

(五時三十分より)  
(六時四十五分まで)

竹本 長尾太夫  
鶴澤 友平造  
竹本 津太夫  
鶴澤 綱造

(人形役割)  
悪七兵衛景清  
肝入 佐治太夫  
娘 糸瀧  
尼野 四郎  
土屋 軍内

吉田 榮三  
桐竹 政龜  
桐竹 紋十郎  
桐竹 門造  
吉田 文之助

第三 安宅關

勸進帳の段

勸進帳の段

(七時〇〇分より)  
(八時十分まで)

武藏坊辨慶  
富樫左衛門  
源勢 義經  
伊勢 三郎  
片岡 八郎  
常陸 坊  
梶下 佐忠  
番 卒

竹本 相生太夫  
竹本 織生太夫  
竹本 源太夫  
竹本 長尾太夫  
竹本 富太夫  
竹本 播磨太夫  
竹本 常陸太夫  
竹本 常陸太夫  
竹本 常陸太夫  
竹本 常陸太夫

(人形役割)  
鶴澤 道八  
野澤 喜代之助  
鶴澤 清一郎  
鶴澤 清一郎

吉田 玉藏  
吉田 玉藏  
吉田 玉藏  
吉田 玉藏  
吉田 玉藏  
吉田 玉藏

第四 卅三間堂棟由来

平太郎住家の段

平太郎住家の段

(八時二十五分より)  
(九時四十分まで)

豊竹 古靱太夫  
鶴澤 重造

(人形役割)  
女房 お柳  
横曾根 太郎  
和太郎 丸  
平太郎 丸  
進野 人  
木遣 人

吉田 文五郎  
吉田 文五郎  
吉田 文五郎  
吉田 文五郎  
吉田 文五郎  
吉田 文五郎

第五 壽柱立万歳

引ぬき團子賣の段

引ぬき團子賣の段

(九時五十分より)  
(十時二十分まで)

竹本 文字太夫  
竹本 織太夫  
竹本 富太夫  
竹本 當太夫  
竹本 隅若太夫  
竹本 野若太夫  
竹本 鶴若太夫  
竹本 鶴若太夫  
竹本 鶴若太夫  
竹本 鶴若太夫

(人形役割)  
豊竹 駒若太夫  
竹本 駒若太夫  
竹本 駒若太夫  
竹本 駒若太夫  
竹本 駒若太夫  
竹本 駒若太夫  
竹本 駒若太夫  
竹本 駒若太夫

吉田 玉幸  
吉田 玉幸  
吉田 玉幸  
吉田 玉幸  
吉田 玉幸  
吉田 玉幸

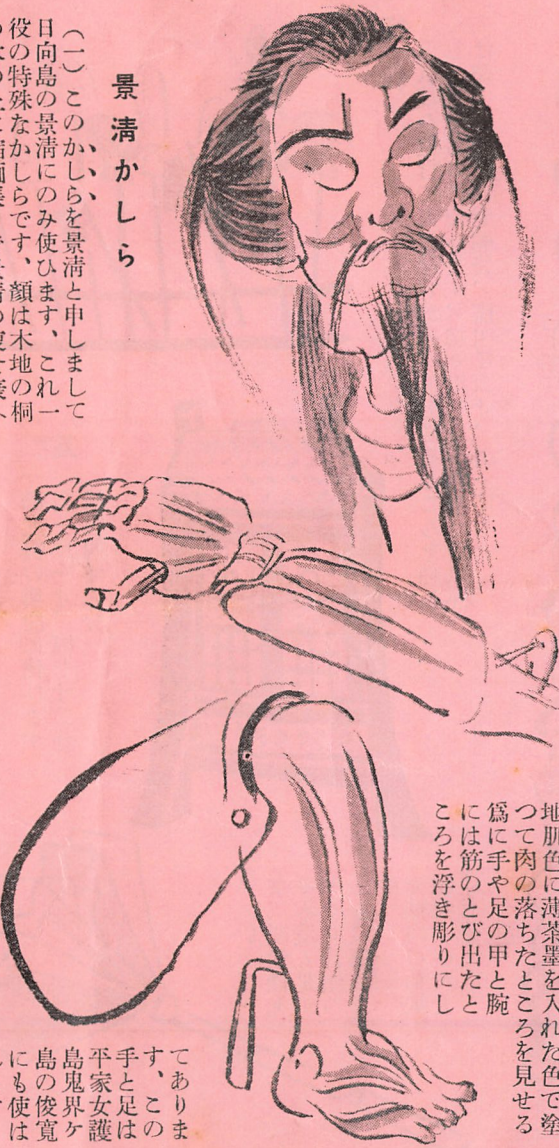
文樂人形圖解 (一)

(此人形圖解は興行毎に續きま  
すからどうぞ御保存下さい)

齋藤清二郎解説並繪

景清手、景清足

地肌色に薄茶墨を入れた色で塗  
つて肉の落ちたところを見せる  
爲に手や足の甲と腕  
には筋のとび出たと  
ころを浮き彫りにし



景清かしら

(一)このかしらを景清と申しまして  
日向島の景清にのみ使ひます、これ一  
役の特殊なかしらです、顔は本地の桐  
の木の上に縮緬張りで景清の瘦せ衰へ  
た感じが良く出てゐます。

(二)あたまは總髪でひつくり眼は  
玉眼で朱色が塗られてあります、作は  
相當古く昔から今に傳つてゐる所謂文  
樂かしらのうちの名寶級の一つです。

一、かしらとは首の事  
二、あたまとは髪のこと

新らしき年の始めを壽はぎて向ふ餅の鏡なり、青海  
原の朝景色、見渡す果に打なびく、目出度き雲の彼  
方まで御國の内と風もなく、浪も静かなぎ渡るごとく  
御目出度い戦捷の新春にふさわしいもので若手連總  
出演で御覽に入れます。

(打出し)

てありま  
す、この  
手と足は  
平家女護  
島鬼界ヶ  
島の俊寛  
にも使は  
れます